日本の読者として書く

杵 渕 博 樹

基本的構え

私は子どもの頃から小説と詩の熱心な読者であった。それが文学部に進学した理由であり、文学研究者になるに至った原因である。文学作品と向き合う際の私の基本的な構えは、十代の頃から今日まで変わっていない。私は自分の生きる世界について知りたかったから本を読み始めたのだと思う。学生時代以降は特に、「ドイツ」を通して「日本」について考え、「日本」を通して「ドイツ」について考えている。

私の研究業績のほとんどは、作品の構造を論じる形式を取っている。すなわち、小説あるいは詩集の構造と、テーマおよびモチーフとの相互関係の特性を明らかにし、同作家作品史上の位置と意義を特定するという方法である。

テクストは基本的に作品単位で読む。ひとつの独立した完成体として読む。もちろん間テクスト性を無視するという意味ではない。解体することなく、還元することなく、種明かしを焦ることなく味わうということだ。そうすると、その作品の個性と特徴が見えてくる。その個性や特徴は、私の経験と知識と直感で発見するわけだが、それらは、つまるところ、歴史的背景、研究史、ほかの作品との比較、作者の意図等の文脈上にあって初めて読み取りうるものだ。これをなるべくわかりやすく説明する。それがうまくいくと、より緻密に、より素直に、より深く読んだ場合の当該作品の姿が立ち上がる。まずは、壊さず、歪めず、カラクリもろとも、ありのままの姿を提示すべく試みる。そして、そのような姿にならざるをえなかった理由を問う。

研究対象の選択

私の研究の柱は、学部卒業論文以来、博士学位論文執筆を経て今日まで、一貫してギュンター・グラス作品の作品論である。私は特にグラス作品が好きなわけではなかった。さすがに慣れてはきたが、読みにくい。生理的に波長が合わないのである。しかしながら、グラス作品の持つ突出したパワーと社会的意義はよくわかった。好みではないが、明らかに偉大である。好みではないから、冷静に、突き放して読める。偉大であるから、本気で付き合って損はない。研究対象との間に、敬意を払いつつケチをつけられる距離感を確保できることは、研究者として好都合なことだと思う。また、学部学生時代から市民運動・学生運動に関わっていたので、私にはアンガージュマンのリアリティがあった。グラスのような「政治的」作家を論ずる場合、このあたりの体験的知識は有用である。クリスタ・

ヴォルフとペーター・ハントケについて論じたこともあるが、その背景には、私がグラス研究を通じて「政治」と「文学」の関係を巡る問題圏に関わってきた経緯がある。

研究の第二の柱であるニコラス・ボルンは、グラスがその死を惜しんでいたことを知って読み始めた。ボルン作品は、率直に言って私好みである。ただし、夭逝したせいで作品が少ないこともあり、世間には余り知られていない。でも私が好きになるということは、そしてそもそもグラスが別格の扱いで言及しているということは、何かがあるのだ。ボルンについてはその「何か」を明らかにしたい、という動機で論文を書いている。

私の研究の第三の柱はクレメンス・マイヤーだが、この作家との出会いは偶然である。ところが、翻訳してみると非常に身近に感じられる作家だったので、付き合い続けたくなった。最新のドイツ文学を論じると、「学術的価値」の如何を云々する人もいる。「先行研究が存在しないものをどうやって研究するんだ」と戸惑う人もいる。この点に関しては、さまざまな見解があって当然だが、私は、「最新作」を論じることには、大いに意義があると思う。同作家の先行作品あるいは何らかの共通点を持つ別の作品を論じた経験、当該作品の主要テーマや基本的形式についての知見、戦後・現代ドイツ語文学全般に関する一定の知識、そして、論証の各段階で対象テクストの中に具体的根拠を示す手続きによって、一定の学術性は担保される。これらの条件を前提として、書評等の反響を踏まえた上で、私は、テクストを読み込み、解釈を積み重ね、その結果を分析する。

研究領域と具体的課題

研究領域の決定には、さまざまな出会いや縁のようなものが、結局は重要な役割を果たす。大学院生はさしあたり否応なく研究領域を絞り込むことになるが、そこでの勉強を手がかりにして、それ以降の研究が始まることになる。私の場合にはギュンター・グラスとその同時代作家というのが「領域」であった。グラス作品については、指導教授であった大久保進先生、山田広明先生、林睦實先生の下で読み方を教わった。他方、藤本淳雄先生のゼミでシュテファン・ヘルムリーン、クリストフ・ハインを、保坂一夫先生のゼミでクリスタ・ヴォルフを読み、DDR文学についても勉強させてもらった。グラスが師と仰ぐデーブリーンはエーバーハルト・シャイフェレ先生のゼミで読んだ。

修士論文執筆時、私は、この「領域」の範囲内で、発表当初の毀誉褒貶が激しく、その結果として、研究者からは比較的敬遠されてきた作品を研究対象に選んだ。その後、新作を追いかけるようになった。また、博士学位論文執筆以降は、そこでの議論の更なる展開が課題となった一方、研究の幅を広げたくなった。これらの基本方針に加え、研究の連続性等を考慮して、私は当面の研究課題を決めている。

誰に読んで欲しいか

私はドイツ語で書くよりも日本語で書く方が得意なので日本語で書くことが多い。だか

ら想定される読者は専ら日本語母語話者だ。同ジャンル、近接ジャンルを専門とする研究者には、「新鮮」なうちに、ひとりでも多くのひとに読んで欲しい。学生や後進に読んでもらえたらそれも嬉しい。読んでもらうからには、単に「学術的」な利用価値・情報価値があるだけでなく、文章として面白いもの、楽しく読めるものを書きたいと思っている。